

歴史学習に生かせる郷土資料

下北の歴史的現象を中心として

鳴海 健太郎

①はじめに

中学校改訂社会科指導要領では、周知のように「指導上『国意事項』のイとして、『郷土の発展の跡を实地調査せしめ、遺跡・遺物を見学させることによつて、わが國の歴史を具體的にはあぐさせ、郷土との関連にのいても理解させるように努める。』と述べている。（文部省「中学校社会 指導書」一九五九・百四十一頁）ところが、現場では①井筒を通して歴史学習の時間数の不足の問題②郷土資料収集の至難な問題③教師の生活地域に対する歴史的意識の低さ等があつて、一般に自主的研究活動は低調ではないかと思う。

それでも下北地方に住んでいる私は、下北の子どもたちを理想のない根無し草や、その日暮しにさせたくはないため、歴史の授業に下北の歴史的現象をその都度挟んでやつて来た。今日では、歴史学の新しい成果を踏えて、どのような教材構成をし、資料を生かすか。―教材研究の注上にある。

下北の歴史的現象は、歴史学習のどのような機会に、どのような形でとり上げ生かすべきであるかは、①歴史授業の導入的働きとして取り扱う場合②下北の歴史の具體的な現象を扱うことによつて、日本史の理解がより可能となる場合等である。

教科書の内容を追っていくだけの学習指導から、生活地域を考えていく指導に力を入れてみたい。東京書籍の教科書「新しい社会2」(昭和四十年四月文部省検定済)に準拠して、郷土資料を利用し、下北に住むもののがかれた現在の状況を正しく理解し、持主とすべき行動の正しい指針を得るための小さな試みであることはいふまでもない。

②郷土資料

へ日本列島と日本人のなりたち(二十四頁)

下北半島の正史は、日本列島の成立の部分を含む半島成立の時から始めなければならぬ。なぜなら、地質学は考古学の研究につながる学問であり、日本正史の解明に役立つからである。日本列島の最初の陸地は、新生代才三紀に成立したと一般に認められている。

下北半島は、才三紀末から、日本のうちで一番遅れて隆起し海退現象が起って、既に出現した北海道・満洲・朝鮮等アジア大陸に接続する一部分として出現した。才三紀は不安時代ともいわれ、地殻変動が起り地層は着しく褶曲・断層など生じ、山川の配置を一度変えた。恐山火山の基盤は、地質系統からみて主として新才三系である。

恐山の火山活動が、林相・植物相・動物相に大きな影響を及ぼしたことは言うまでもない。才三紀当時の気候は、現在より相当温暖であつたらしい。それは半島に繁

茂した森林地帯には、野獣が生存していたことから想像出来る。

(資料)

和田干蔵「二万年前の郷土」東奥日報・昭和二十三年

二月十日付

浅正雄・井尻正二「日本列島」岩波新書・昭和三十八年

御原保真・桑原幸夫・生出慶司「恐山火山の地質(予

報)」下北半島北部の才四系才二系―資源

科学研究所彙報四十三(四号・昭和三十三年
桑野幸夫「田名部周辺の才四系」下北半島北部の才

四系才一系―資源科学研究所彙報才四十号・

昭和三十一年

下北半島の北東尻屋崎付近には、古生代に属するといわれる大石灰岩体がある。この石灰岩体のレックの充填堆積物から、才四紀哺乳類化石が採集されている。

洪積世になってからは、高嶺麓の下北半島にも象が踏みとどまつて生存したことがわかった。古生物学上のアウマン系のアオモリ象の発見は、地質学と相俟つて、洪積世における大陸との陸続きであつたことを立証してくれる。

(資料)

中島全二・桑野幸夫「下北半島尻屋崎における才四紀哺乳類化石の産出状況について」資源科学硯

究研彙報四三・四十四号・昭和三十二年

湊正雄・井尻正二「日本列島」昭和三十八年

直宜信夫「日本の誕生」—原始力オス期の歴史—カッ

パックス昭和三十五年

ハ日本の旧石器の文化—二十五頁

「世界史」という時間的にも壮大ながりを持つ歴史の中で、また日本史の舞台の中で、下北半島の歴史を容易に考えられる可能性が見出せる。東北大の井沢長介氏は、下北半島のプレ縄文文化の追跡をしている。文献によれば旧石器の産出地点として尻屋崎があげられる。下北地方研究誌「うそり」創刊号には、下北半島無土器文化資料①②を掲載し、フレード文化を証明する利器があげられていることは、注目に値する。

マルタ遺跡は、バイカル湖の近くにあるシベリア最古の遺跡のひとつで、後期旧石器時代末に属するとすれば、下北半島のフレード文化にも比定する上で、多くの示唆を与えることが必至である。

(資料)

井沢長介「先史時代・無土器文化」(考古学ノート

—日本評論社・昭和三十二年

地方研究誌「うそり」創刊号・二号下北史談会談・一

九六五年

湊正雄・井尻正二「日本列島」昭和三十八年

加藤九祐「シベリアの歴史」一九六三年

山内清男・佐藤達夫「青森県上北郡甲地村長者久保遺

跡略報」一九六五年

ハ狩りや魚の生活—二十六頁

昭和二十六年(一九五一年)東大・慶応などの考古学者が中心となり、東通村総合発掘調査が行われた。その研究成果は、日本考古学年報・各考古学関係雑誌に掲載されている。

下北半島における海岸附近の聚落に附属している多くの貝塚は、酒詰仲男氏の日本貝塚地名表(日本科学社・昭和三十四年刊)によつてあらわである。なおむの市田名部町最花貝塚の模様が、江坂輝詠氏の発案によつてむの市役所玄関前に飾られ、貝塚の厚さから、海の幸にめぐまれに生きに教材として珍重されている。

(資料)

江坂輝詠「最花の貝塚」東奥日報・昭和二十三年十日

十三日付

酒詰仲男「日本貝塚地名表」日本科学社・昭和三十四

年

江坂輝詠「青森県田名部町女館貝塚調査報告」田名部

地紋委・昭和三十年

大塚詠之助「青森県下北郡最花の貝塚」

地質雑誌四〇の五一—

江坂輝詠「大向平貝塚発掘記」貝塚才二十五号・昭和

二十五年

下北半島貝塚地名表

貝塚名	所在地	地形	自然遺物	文化遺物	編年	典拠
最花	むの市田名部最花	台上	貝類・獸類 鳥類・ウミガメ 魚類・木炭 岩石	土器・石器 土製品・骨角器 貝製品	最花式 円筒上層式 オホーツク式 大洞B・C式	佐々木安氏「下北半島先史文化総合発掘調査」昭和26年11月
女館	むの市田名部女館	台上	貝類・獸類 鳥類・魚類	土器・石器	円筒下層C式 (女館式)	江坂輝弥氏「石器時代152」昭和30年10月
万人堂	むの市田名部万人堂	斜面	貝類		正世のもの ?	江坂輝弥氏「最花の土器」貝塚49号昭和29年5月
ドーマンチマ (大岡平)	大岡町大岡平	砂丘	貝類・獸類 鳥類・魚類	土器・石器 骨格器 貝製品	大洞B式 大洞C2 大洞A式	日本考古学会年報33・34 昭和30年4月
野牛沼西畔	東通村大字野牛	砂丘下	貝類	土器	縄文前期	江坂輝弥氏報告 昭和31年
物見台	東通村尻屋物見台	砂丘		土器	大洞C式	貝塚42号 昭和31年5月
岩屋洞窟内	東通村岩屋洞窟(海蝕)	洞窟	貝類・獸類 鳥類・植物 木炭・灰	土器・木器 貝製品・鉄器 鉄製品	近代のもの	
ムシリ	東通村尻屋ムシリA地区	台上	貝類・獸類 木炭	擦文土器・骨器 須恵器・土器		日本古考古学会 昭和28年4月
尻屋札地	東通村尻屋札地	台上	貝類・鳥類 魚類・木炭 灰	土器・石器・骨角器・土製品 貝製品	縄文晩期	貝塚37号 昭和26年7月

◎酒 諾 仲 男「日本貝塚地名表」による。昭和34年

江坂輝跡「下北半島ドウマンチヤ貝塚調査略報」九号

会連合・一九六三

江坂輝跡「青森県下北半島最花貝塚の調査日誌より」

石器時代才五号・一九五八年

縄文式土製品の一環として、下北半島においても土偶が発見されている。実は土偶の用途は未だ解明されていない。江坂輝跡氏は仮設的ではあるが、「女性の出産という生殖力に対する神秘性は、東北シベリア原住民のあいだに、ある信仰とは結びつかないか」と述べている。

(枝倉書房「土偶」五頁)

前期後半の土偶が、下北郡股野沢瀬野遺跡から発見され、また中期の土偶はむの市最花遺跡・後期のものは尻屋字札地へふぢち遺跡・晩期の土偶は、むの市大湊下町八森遺跡より発掘された。

(資料)

江坂輝跡「土偶」枝倉書房・昭和三十五年

橘善光・篠達喜彦「青森県股野沢瀬野遺跡」貝塚才二

十七号・昭和二十五年

橘善光「青森県下北半島八森遺跡調査概要」貝塚才四

十二号・昭和二十七年

山内清男・江坂輝跡「日本原始美術①②」講談社・昭

和三十九年

江坂輝跡「青森県田名部最花出土の土偶」貝塚才四十

二号・昭和二十七年

へ縄文式土器」二十七頁

下北半島には、考古学の発達史上特に珍重すべき資料が二つある。

一つは佐井にある箭根森八幡宮御宝帳(清水芳氏蔵)

一つは大畑にある原始縄文風土年表(村林源助氏蔵)である。

前者は「一、宝永六己丑年十月十六日湊役人本堂善文

殿、矢根竜平御持参盛岡御用人家御取次殿様江指上申越前御受取文御状参候」縄文文化石器の銚石に關する好資料である。後者には明和三年(一七六六)「丸の距一尺三寸郭の高三寸此内に高五寸長一尺巾三寸五分砥の如き物を彫浮せるを堀出せり此湧鑑には何人の住し」砥と水入と一の石を用しは、何たる世にか有けん」また天明元年(一八一一)「今湧鑑の峯際石塚の中より巾七寸の樹益ハセキタイ」に砥ぐの物を採り得しもし奇なり」とある。

石皿は、奥羽北半の一部にのみ存する特殊なもので、原始農耕の仮説も生まれている。大正六年

五月より、昭和二年十二月に至る約十年間に報告された資料に「日本石器時代遺物発見地名表」ハ才五版・東京帝国大学編、同書院刊 昭和三年がある。これには下北の石器時代遺物が九個のみ記されている。

下北地方は、旧海岸等墓地帯の機密保護上、重要遺跡が多くあつても、数少なく報告されて来た。戦後はじめ

て重要遺跡が續々発見され、考古学上の宝庫となつてゐるのである。

下北半島で特に注意しなければならぬのは縄文早期の文化の問題である。大阪市立大の角田文衛氏は「北方的文化要素は、北海道南部や下北半島などにしばしば検出されるのみならず、更に今日の知見によれば南東地方にまで見出されるのである。―北方的右住吉系文化が、特に北政の櫛目土器前期と断ち離し庫裏にあることは、土器石器に着取される相互の近似から明瞭に言えるであらう」と述べている。(史学雑誌才六十編才六号)これは、下北の始源文化を世界史的位罫から見定めようとした好論文といえる。

また慶応の江坂輝政氏は「吹切沢式土器ハ下北半島東通村吹切沢遺跡土器の型式への施文法が、東北アジアに広い分布圏をもつ櫛目土器の古形式の土器に非常に近似したものであることは注意すべきである」と考へる。シベリアの極東地域・沿海州方面の考古学的調査が置れてゐるため、この關係を速かに明かになし得ないことは残念である。(日本歴史百五十三の三)と発表している。

江坂の論文も、下北半島の早期遺跡を世界地理的環境のなかでとらえようとしている。下北半島も、人類の歩みの中で世界史的共通性あるいは相似性のもとで出発したことを、キチンととらえさせなければならぬ。

(資料)

中島全二「下北半島新石器文化の編年的研究」考古学雑誌三六の四・昭和二十五年

江坂輝政「下北半島の考古学的研究―付表―下北半島における既調査の主要遺跡分布図と地名表」

九学会連合昭和三十九年度大会発表・於上野国立博物館講堂 一九六四年

江坂輝政「下北地方の考古学的調査回顧」人類科学十

七八下北ⅡⅤ昭和四十年

ハ新しい土器と金屬器Ⅴ二十八頁

今日下北半島に於ても、明らかに弥生式文化の影響が波及したことは疑う余地がなくなつた。縄文文化人が、新しい弥生文化を受容し農耕に入つたとみるべきである。下北半島には、縄文晩期および縄文式の一型式とみられる大洞式土器片出土遺跡が多くあり、東北大の伊東信雄氏から「田舎館式」と思われれた時期もある。(貝塚才四十七号)

昭和四十一年四月、下北郡大畑町二枚橋地区遺跡に於て、東北大学文学部長伊東信雄氏を団長に、農耕文化研究の一過程として調査した。出土品は、東北北部の弥生式文化を解明するための貴重なもの、
「二枚橋式」として学会発表も近からうと思われる。また北海道渡島半島から直南西部に分布する恵山式土器文化は下北の各遺跡発見の土器文化と密接な關係があると考へられている。

(資料)

江坂輝弥・村越潔「農耕起源の文化を探る」(下北半

島の学術調査報告)東奥日報昭和四十年一

月二十八日付

伊東信雄「考古学上から見た東北古代文化」東北史の

新研究所収・昭和三十年

伊東信雄「東北地方の弥生式文化」(「文化」復刊八

号)

ハ邦馬台図V三十三頁

一般に歴史家の間では、邦馬台図の女王御祓呼はシマーマンの性格が濃厚な存在としている。鬼直は即ち呪術・シマーマニズムと考えられ、お祈り、まじないによって人力でできないことを成しとけるのである。

現代の巫女(イタコ)とか口寄せと同類のものとみることによって、日本人の心のふるさとを究明する意欲をもたせたい。ただ例年行われる恐山の大祭は、地蔵講を中心とした仏教行事であるが、マスコミによって残存文化的異質なシマーマンを狙い強調し過ぎている。今日では、社会的地位は一般に低く、職業とみなされることが多いイタコを、表現と思いつきだけでジマーナリステックなものにとどめたいために、日本人の心の歴史から、イタコを現代の目であらえさせたい。

(資料)

中山太郎「日本巫女史」大岡山書店 昭和五年三月

鳴海健太郎「恐山のイタコ寛書」東奥文化才二十七号

昭和三十九年

石上玄一郎「恐山の巫女の正体をさぐる」旅三十大の

八 昭和三十七年

ハさかんなへんさん事業V五十三頁

青森県史才一卷は、「日本書紀」「続日本紀」の記事をトッポ史料としている。竹内運平氏は「青森県歴史」(昭和十六年刊)に、書紀の有間決を、十三往來の文中に恵瑠磨明神があり「アリマ」に似ている事実から十三湊に擬すという。阿倍臣は秋田附近から津軽・下北半島などこまで北上したが、その終点は不明である。先日論文を出来るだけ多く詭人伝結果、仮説を立ててみた。日本書紀にみえる「胆振鉏」の古地名は、今日の「佐井」であるとすると発想は、菅江真澄・吉田東伍西氏の研究にもとづいている。

(資料)

島谷良吉「津軽海峡の史的探究」昭和十九年

上野喜一郎「船の歴史」昭和十九年

鳴海健太郎「胆振鉏の古地名について」①②うそり創

刊号・二号 昭和四十年

神林淳雄「東北開拓史序説」(考古学評論才四号)

喜田貞吉「本州に於ける環夷の末路」(「東北文化研

究」一の四)

ハ律令政治の修正V五十七頁

古代の下北半島には、帳夷が住んでいた。従って東北

人はアイヌを祖先とする論が今でも必られる。ところが日本の歴史を貫いている一つの大きな欠陥が、北海道と一衣帯水を下北半島に残存するとすれば、アイヌ即蝦夷か、蝦夷即否アイヌかの未解決の問題がある。卒直にいつて東北の蝦夷は単一の人種であろうはずがない。東北大の高橋富雄氏が指摘する如く「蝦夷」というのは、何よりもまず歴史学的観念」なのである。

古代の蝦夷というのは、シマモでもあり、アイヌでもあり得ることは、考古学の研究成果からいい得る。シマモとアイヌの雑居する平和的な生活の絶縁に過ぎないのではないか。

（資料）

高橋富雄「蝦夷」吉川弘文館 昭和三十七年

古代史談話会「蝦夷」朝会書房 昭和三十一年

伊東信雄「東北歴史考古学の発産」古代文化十六の四

昭和四十一年

伊東信雄「考古学上より見たる古代東北文」文化史講

演集 昭和二十三年

斎藤 忠「北日本の古代文化」古代学二の二所収 昭

和二十八年

八淨土信仰 六十五頁

死ねば恐山（おやま）へ行くと信じている人が多い。青少年少女等全集「今昔物語」を読んで聞かせ、地獄極楽の話することは有意義である。三途の川・賽の河原

・針の山等伝説に因んだ浄土信仰・地藏信仰への関心は下北の子ども達にとつて欠かせない。戸川幸夫氏は、現代娘には、恐山でなぞ石を積み重ねるのか？わからない。という写真を見せている（「下北と都井」新潮社 昭和三十八年）教師は、民俗学的思考を忘れてはならない。山中に地獄があるという記録は古く、恐山にも古代日本人の山中他界観念の如実な表出は今なお生きている。

（資料）

堀一郎「民間信仰」岩波全書 一九六六

高橋富雄「奥州藤原氏四代」吉川弘文館 昭和三十五

年

渡辺照宏「死後の世界」岩波新書 昭和三十四年

フランソワ・スレゴワール渡辺照宏訳「死後の世界」

クゼジュ文庫 一九六五

岩本裕「極楽と地獄」三一書房 一九六五

和歌森太郎「山伏」中々新書 昭和三十九年

岡本太郎「東北文化論」中央公論 昭和三十七年十一

月号

八淨土信仰と芸術 六十五頁

むの市にある浄土宗隋庵寺は、延宝三年（一六七五）田名部大火の時に焼けた。延宝六年に再建したが、貞享三年（一六八六）大本山浄華院より本尊阿弥陀如来の本仏座像を譲り受けた。これは藤原時代仏師定朝によって作られたものである。

定朝の作品は、浄土教を信仰する当時の公家精神を風格に表現した様式で、定朝の円熟した型で、自然に美しく整ってしかも壁々とした風格がみられる。技法は木寄法を完成した軽快な本彫法である。平安末期期仏像彫刻の典型といわれ俗に定朝様といわれる。大正四年三月国宝に指定された。昭和二十五年八月、文化財保護法が施行されると同時に文化財保護委員会は、旧法指定の國法を重要文化財と見なした。

(資料)

恒沢魯羊「田名部町誌」昭和十二年

美術出版社編「仏像ガイド」昭和三十七年

「東奥文北」才八号・口絵附説 昭和三十八年

「図説日本文化史大系」九江戸時代上 小学館・昭和

三十三年

へ後三年の役、六十八頁

八幡宮は、下北の大畑・佐井・川内・岐野沢等に存置している。八幡宮は源氏の氏神となり、武家政權の成立とともに武神としての性格を強めている。八幡信仰を中心し、前九年の役・後三年の役を話し、郷土のまつりを理解させたい。前九年の役に、守曾判の阿倍富忠が官軍に殉じたという事も、当時の一景観を告ぐるものと、竹内蓮平氏は述べている。

(資料)

竹内蓮平「青森県画史」 昭和十六年

陸奥新報社「つがるの夜明け」 昭和三十四年
へ新しい文化、八十六頁

享保三年(一七一八)に書かれた「奥々風土記」の中には、「正津川のわたり北海をすべて奥の海と言なり。故名所と言はかりにもあらねど古より世間に聞えて古歌にも見えれば、今は名所の数にはなれり。新古今集卷十四恋の部に

定家朝臣

たつねあつるつらき心のおくの海よ

汐干のかたのいふかひもなし

此余数多見えたりと悉くは載せず歌に奥の海とよめるは皆此所なり、扱又之ぞか岩屋といへる処、今も猶此所彼処にあり。すべて此の辺は悉くの住居りし処なりとなん故今も其旧跡は残れるなるべし」

「奥の海」——真に虚い海に思われてならない。しかし、下北半島は見すてられない昔の歌枕となつた文学史上の地であつたのである。

東北の事情に疎い都人の歌枕を中心にして話してゐるのも有意義であらう。

(資料)

青森県「青森県史」卷四の四六八頁 大正十五年

角川書店刊「国家大観」昭和二十六年

国民図書刊「校註大系」二十四 昭和六年

へ農民の成長、九十九頁

むの市の浄土真宗徳玄寺は、文禄三年（一五九四）如賀の保玄がはじめ五戸の石沢に草創した。一向一揆の際逃れ来たという。（住職石沢完氏談）田名部にさらに移ったのは、寛永二年（一六二五）である。

下北半島では、豊臣末期から、徳川初期に至って多くの寺院の建立が目立つ。これは和人移住が室町期に顕著であつたことを示す。下北半島への移住の動機については、

①戦乱・一揆に敗れて流浪し移つた武士・僧などが定着した。

②飢饉の時に蝦夷地に渡海しようとしたが下北に土着したものの。

③漁業・林業等を中心とする出稼ぎのためやつてきて土着したものの。

④海運発達に伴い移動した地方商人の土着したものが主たるものである。

（資料）

笹沢倉羊「下北半島史」昭和三十七年

徳玄寺の歴史「下北新報」大正十五年八月十日付

鳴海健太郎「下北半島にみられる苗字」未発表

八江戸幕府の成立（百二十三頁）

伊藤祐清の「私記」によれば、慶長十九年（一六一四）南部方は関東方より加勢の依頼があり、大坂冬の陣に田名部の蝦夷を率いて徳川家に従っている。参戦理由と

して考えられることは、①大坂の陣に秀忠の軍勢下で、下北の蝦夷を使用することによって、南部知行の初期権力構造を支える一手段としてゐること②そのために大量の軍役供給の基盤としたことなどがあげられる。

（資料）

鳴海健太郎「下北地方史談」昭和三十四年

鳴海健太郎「下北半島アイヌの足跡」とうろ才六十六

号 昭和四十一年

南部家書四「枯清私記」昭和三年

菊池悟朗編「南部史要」昭和三十五年

八村のしくみ（百二十八頁）

下北の農民生活を浮き彫りにする好資料は見当たらない。

しかし、部分的には下北の近世文書、本藩の文書等によって知り得る。南部藩の本百姓・水舌百姓・田名部通の肝入・検断・藩の農民政策等について具体的に話すことが出来る。また下北にあつた江戸時代の村八分（元治二年（一八六五）の実話が、伝説と存つて、今なお生きている。

（資料）

岩手県史才五卷付録「旧藩時代の農民」昭和三十八年

小笠原二郎「菊池家文書について」青森林友 一九六

二年九月号

伝説の旅⑩「半太窪」東奥日報 昭和四十一年九月十

日付

笹沢魯羊「下北地方誌」 昭和九年

「半太虫のいわれ」毎日新聞 昭和三十三年十二月十

五日ハ津軽と南部の民話

笹沢魯羊「宇曾利百話」 昭和二十八年

八大名の統制百二十五頁

南部藩の戦政切り抜け策はどんなものであったろうか。

下北半島のヒバ山は重要な戦源であった。藩は突飛な支出の場合、ヒバ山の伐採を許可し、豪商から巨額の礼金

をとっている例がある。「田名部記」の古記録が事実を

物語っている。南部藩も江戸城北の丸の修理・廬州大井

川普請費の支出・日光山御坊修理・江戸城浚堀役を命ぜ

られている。

南部藩の戦政危迫に要因をあゆめば①幕府御用金の賦

課②連年の飢饉③産産資源の減少④戦政放漫政策等があ

けられる。

(資料)

森嘉兵衛「旧南部藩における金融恐慌」(岩手県立図

書館蔵)

森嘉兵衛「旧南部藩における百姓一揆の研究」 昭和

十五年

加藤 章「藩政の確立」(南部藩) 歴史教育十一の

十一 昭和三十八年

浅野源吾編「東北産業経済史」巻六 昭和十二年

八主従関係百二十九頁

下北半島には、「よぼし子」という制度があった。こ

れは主従の親子擬制で、中世社会の武士向の主従関係が、

庶民の生活でも重じられるようになった。和歌森太郎氏

は次のように述べている。「旧来大家族の家長に依存、

していたものを、家族外に求めて結びつこうとした。」

封建的人向のタイプが、下北の現実になお一部伝承して

いることをつぎとめたい。

(資料)

和歌森太郎「日本民族史」 昭和三十八年

笹沢魯羊「宇曾利百話」 昭和二十八年

山田敬道「農村における社会成層」

「後の親子関係の問題を通して」

社会評論二十五号 昭和三十二年

下北半島に於て、分割制限の實行があつた。家長的家

族制衰時代の名残りが、太平洋戦争の終りごろまで続い

た。李家と分家の関係を、部落共同体であつた尻屋につ

いて考へさせたい。

(資料)

盛田 稔「青森県下北郡尻屋部落における特殊慣行に

ついて」 昭和二十九年

堀 経夫 他「青森県尻屋部落経済制度一般」 昭和

六年

田村 浩「農村村共産体の研究」 昭和六年

馬場進八「部落慣行並制度」 昭和十七年

へ各地の産業」百三十八頁

江戸時代における下北の南部藩林政史は、伐採自由の時代、山林取締の時代、苗山村農業漁業振興の時代、桧山管理強化時代、遺反者処分時代と一応区分することが出来る。下北の山林が、南部藩の有力財源であったことは、今日では何人も知っている。

(資料)

蔵林恒「日本林政史資料」(盛岡藩) 昭和七年

蘆蔵安太郎「山林史上よりみる東北文化の研究」 昭和十三年

和十三年

浅野源吾編「東北産業経済史」才六巻 昭和十二年

古島敏雄編「徳川時代における林野制度の大要」 昭和二十九年

和二十九年

八支通と通産」百四十一頁

盛岡藩では、下北半島にある天然性の桧山の伐出しによつて、江戸・大阪・北陸等に材木を送った。下北半島は、三方海に囲まれ地理的位置からして西廻りと東廻り海運の接点となっている。下北の海運の発達が、上方・北陸・江戸の先進文化と商品の流通を媒介にして直接に結びついていた。

原 勝郎「日本史上の奥州」 奥羽沿革史論・大正五年

年

鳴海健太郎「下北半島における飛騨屋久兵衛の争証」

うそり才三号 昭和四十一年

古田良一「青森県下の海運史料」 青森報恩会時報才

六十号 昭和六年 弘前大学国史研究才八

号 昭和三十二年

吉野朝史蹟調査会「南部家文書」 昭和十四年

牧野信之助「越前若狭古文書」 昭和八年

古田良一「東奥海運及び西廻海運の研究」 昭和十七年

湯浅五郎「茨城県那珂湊市郷土資料集成」才一集 昭和三十六年

和三十六年

村林鬼工「原始縄文風土年表」 県文化財保護協会・昭和三十二年

和三十二年

八江戸と大阪」百四十二頁

三都と下北半島との関係は、材木流通の海運にある。

海運は産業・経済・文化等に及ぼす影響が大きい。下北半島の佐井・田名部において俳句が流行し、上方や北国の俳人との間に船便によつて四季折々の俳句の贈答がなされた。

京都で俳道を伝授されたものが多い。菅江真澄が、大畑・田名部の文人と深く交遊していたことや、伊能忠敬が下北に文筆家が多いことを指摘している。下北と大阪との関係は、わが国の東申信仰の中心は、大坂四天王寺であったが、江戸時代下北の東申信仰は皆大坂につながっていたといえる。

江戸からは、主として文政明の絵画・細井広沢・三井親和等の墨書が、海運によつて下北に入った。いわば下

北は、海運文化の恩恵を蒙っている。

(資料)

望 徳忠「庚申信仰の研究」 昭和三十六年

世沢魯羊「佐井村史」 昭和十二年

南部義書才六冊「牧の朝露」 昭和二年

村林忠工「原始護筆風土年表」 昭和三十三年

秋月龍咲「下北半島に残る庚申信仰の諸形態」 弘大園

史研究才九号 昭和三十三年

八町人の台頭 頁百四十二頁

下北半島に關係する遼南で、政治上の力をもちず裁判された、或は悲運におわつたものに飛弾屋久兵衛と錢屋五兵衛があげられる。

飛弾屋の内部で反旗をひるがえした大畑支配人嘉兵衛の策動が、松前藩の借款の問題をからんだ事件がある。場所請負人飛弾屋とロシヤ人との交易關係を明らかにし、囚禁を犯したか否かの調査であつたが、結果的には松前藩を相手に勝訴した。

錢屋が河北浮事件のために一族が牢獄に拘引された時、川内にありに錢屋店の久次郎は木主宮腰、木屋虚松と共に油周旋の嫌疑をうけて逮捕され、錢五の事件は北限下北にも波及した。この事件を語るには、加賀藩の政治経済のうごきをとらえることが必須の手づきとなる。

(資料)

田村栄太郎「錢屋五兵衛」 歴史科三三の九

中央公論社編「続偽りぬ日本史」 昭和二十七年

有倉弥八「錢屋五兵衛と書森」 昭和三十三年

鳴海健太郎「下北半島における飛弾屋の事歴」 うそり

才三号 昭和四十一年

北海道庁「新撰北海道史」 昭和十二年

八田沼の政治 頁百四十六頁

旧南部藩では、大饑饉が元禄八年(一六九五)、宝暦五年(一七五七)、天明三年(一七八三)、天保九年(一八三八)と四度おこつた。これを南部の四大饑饉と呼んでいる。就中天明の饑饉の時の下北の様子はどうであつたか。本藩の救済策はどうであつたか？

ヤマセ八幡東風、ケガメハ飢渴、ガシハ餓死、と閑筆させて教える必要がある。

(資料)

小泉浩吉「南部饑饉史」 東京区事新誌才二百三十四号

昭和六年

森嘉兵衛「旧南部藩に於ける天明の飢饉」 社会経済史

卷二の一 昭和七年

森嘉兵衛「旧南部藩飢饉史の研究」 岩手県教育十二の

十二 昭和九年

鳴海健太郎「大畑の歴史稿」 昭和三十七年

檜雪地方農村経済調査書「東北地方凶作に關する史的

調査」 昭和十年

盛田農民文化研究所「東北凶作の歴史的的研究」 昭和

十年

八百姓一揆の高まり、百五十頁

下北半島でおこつた百姓一揆は、森嘉兵衛博士によれば、次の三つがあげられる。

○文化元年（一八〇四）九月田名郡區・夫伝馬過重・愁訴失敗・数百人

○嘉永六年（一八五三）八月田名郡通重税反対奸商腐蝕・打毀成功・数百人

○明治二年（一八六九）正月北郡・二戸郡・三戸郡新管理者反対・越訴成功数千人

百姓の要求は、入れられたもの或はすえ置きになつたもの、デーンは首謀者の処刑まで行われぬ。人向の幸福と生命を守り抜こうとする下北の百姓の気風の中にも、悪政・封建社会の圧制に抵抗を示したことを忘れてはならない。

（資料）

森嘉兵衛「旧南部藩に於ける百姓一揆の研究」 昭和

十年

横川良介「内史略」後巻の八・後巻十七（岩手県立図書館蔵）

村林彪工「原蛤護筆風土年表」上 昭和三十五年

青木虹二「百姓一揆の年次の研究」 昭和四十一年

青森県「青森県史」巻五 大正十五年

鳴海健太郎「大畑の歴史稿」 昭和三十七年

八蘭学、百五十三頁

大畑の村林家の先祖は、近江神崎より移住し現存している。多くの古文書があるが、村林彪工の筆写本の中に「飛耳長目蘭経」という一巻がある。これには蘭字蘭語が記入されており、飛行船・野礼発的笛（エシキテル）等の語も見える。若かりし頃より博く見聞しており、大畑でも蘭学を学ぶものが出たことは、西廻海運による長崎文化の移植か、東廻海運による江戸文化（深川を中心とする）のどちらかが考えられる。

（資料）

村林彪工「飛耳長目蘭経」（大畑町村林家蔵）

池田哲郎「東北諸藩の蘭学」（東北史の新研究） 昭

和三十年

伊能忠敬は、下北半島にもやって来た。忠敬の一本気な情熱と精力が、日本沿海奥地全国をつくりあげたと思ふ。享和元年（一八〇一）十月十七日辰谷着、下北半島を一周して野田地に出ている。「奥ノ南部マ冬シ」とあり、大雪中の南部焼山附近測量の辛惨、北国の冬の旅の困苦の描写は、我々の心をうつものがある。

（資料）

伊藤弥太郎「伊能忠敬」 昭和十八年

今野武雄「伊能忠敬」 昭和三十三年

青森県叢書「東並諸家紀行集」 伊能忠敬測量日記抄

昭和三十七年

ハ教育の普及ノ百五十四頁

下北の寺小屋教育は、決して他地域に倣れをとつていない。本県教育史的研究も、元弘大教授前野善代治氏によつて、全貌があらかりかとなつた。下北の近世教育史は、まだ開拓の余地はあるが、一応教育普及度が高く特に海運経済と海運文化の関連においてより深く研究してみることがあるかと思ふ。

(資料)

前野善代治「青森県教育史」下 昭和三十三年

文部省「日本教育史」下 昭和三十三年

高田聖夫「下北教育史考」 昭和三十八年

柳谷豊太郎「寺小屋正保堂について」ウソリオニヌ

昭和四十年

ハ外国船の出現ノ百五十八頁

元文四年(一七三九)ロシアの黒船が東北海上に出没してから、日本では海防論がやかましくなつた。延享二年(一七四五)、寛政九年(一七九七)には、尻矢沖に出没しており北方警備のため、幕藩の役人の往来がはげしくなつた。実は下北にみられる百姓一揆の中には、北方警備と大いに関係する。

(資料)

田中喜多美「ロシアの東侵とわが北国警備の歴史」旅と

伝説大の六 昭和八年

室蘭市教育委員会「室蘭南部陸奥」 昭和二十九年

村田専三郎「南部陣屋考」 昭和十七年

有馬成甫「文化四年のエトロフ事件とその影響」 室

華史研究二の三・四・六 昭和十一年

ハ高まる政治への関心ノ百五十八頁

探検家をはじめ、紀行家や俳人等の下北の往来は少なからずあつた。北方探検家でも下北に特に関係あるのは松浦武四郎である。嘉永三年(一八五〇)下北沿岸部をくまなく踏査して残した「東奥沿海日記」は貴重なものである。

(資料)

住田正一編「日本海防史料叢書」九巻 昭和八年

吉田武三「評論松浦武四郎」 昭和二十八年

ハ富国強兵をめざしてノ二百二十二頁

明治十年初期自由党の幹事林正則(彦平)は、その主宰する雑誌「近事評論」に「東北人は無能力にして、不甲斐存し」と批評し、「白河以北一山百文」とさげすんでいる。立憲政治に於て、東北人の政治的自覚、欲求は弱かつたことは事実である。

計画的に東北の地租を高率化せしめたものか。東北の事情の無知が、凶作に罷舞われぬ地方と同一化したことは、結果的に東北農民の貧窮化政策であつた。なお官林主義の圧迫は、明治三十一年下北郡森林原野特別区分領同盟会といつた組織に結実する。

(資料)

和十年

古島敏雄「日本林野制度の研究」 昭和三十年

松波秀策「明治林業史要」 大正八年

鳥羽正雄「日本林業史」 昭和二十六年

盛澤治一郎「公有林整理史」 昭和二十二年

遠藤道之助「徳川期の村共同体の組織」史学雜誌六四

の二

平凡社編「日本残酷物語」才四部

「保障なき社会」 昭和三十五年

ハ士族の動き 二百二十六頁

下北には旧会津藩(斗南藩)の大半が移封された。警

視庁の羅宇幕業の時、下北から不士族永岡文辰が、鹿

家橋事件に關してとらえられた。斗南が丘の屯拓史は、

血涙の正史でもあった。

(資料) 坂李 功「農地開拓の進展過程」 うとう才四三号

昭和三十三年

堀江保蔵「旧会津藩士斗南士族の就産」経済論叢二十

九の六 昭和四年

土屋喬雄「明治初年に於ける旧会津藩士」

「農業経済の諸問題」 昭和六年

土屋喬雄「明治前期経済史研究」卷一 昭和十九年

へ学校教育のはじめ 二百二十九頁

明治六年、小学校設立の仕組従来の私塾廃止の件が青

森興参事より画策された。いちばやく下北には、次の学

校の創立を見た。

大畑小学校(二月十一日)、大間小学校(七月一日)、

川内小学校(七月八日)、才一田名部小学校(七月十日)

、明治以後下北の生活の食しきは自立のが、江戸時代

から続いた教育思想は、決して食しくなかつた。四校の

初代校長はすべて旧会津士族である。

(資料)

前野喜代治「青森県教育史」下 昭和三十三年

葛西富夫「下北教育史考」 昭和三十八年

八復古思想 二百三十頁

明治元年、神に混落禁止となり、各神社の御神位を改

めた。下北郡限野沢の八幡宮の御神位が観音像であるこ

とかわかつた。修験者渡部伊蔵は、観音像が浄土宗悦心

院に移転されたことに責任を感じ、割腹自殺しようた

悲劇がおこつた。

③おわりに

下北に關する論文、著書を読んで、正史学の成果を教

材構成する可能性を見つけた。東書の教科書も使うが、

教師みずから探ひ、教師自ら探索した教材、生活地帯に

直接ふれる生きた教材を用いて筋の通る授業をしごみた

い。これが私の意願である。